高松塚古墳の壁画の復原

田　村　唯　史

関西大学では2008年7月5日に高松塚古墳壁画再現展示室竣工記念として来村多加史先生（奈良文化女子短期大学教授）と米田文孝先生（関西大学教授）による講演会『高松塚古墳壁画を探る』が行われた。それに伴って高松塚古墳の壁画の復原を行った。

復原の手順

復原は以下の手順で行った。

①線描画を作成しそれをパソコンに取り込む

②消えている線の復原

③色付け

線描画の作成にあたっては来村先生の作成した図をパソコンに取り込みデジタルデータ化し、同先生の指導のもと、カビの繁殖により消えてしまった線を復原した。色付けに際しては高松塚壁画館で作成・展示されている復原図をもとにし、来村先生、米田先生の指導のもと色見本を用いて高松塚古墳の壁画制作時の色を復原した。

四神図の復原

高松塚古墳には陰陽五行説に基づいた各方角を統べる四神図がそれぞれの壁面に描かれていた。すなわち東壁には青龍、西壁には白虎、そして北壁には玄武が描かれていた。しかし南壁には朱雀は描かれていなかった。朱雀図が描かれていたと考えられる位置には盗掘孔があるため朱雀図は盗掘により剥がれ落ちたと考えられる。四神図の復原にはキトラ古墳の四神図を基本として、薬師如来像台座の四神図、四神八卦十二支鏡の四神図を参考資料とした。

青龍図…東壁に描かれた龍の図。比較的よく残っていたが高松塚壁画館の壁画検出時に模写された図を基本とし、壁画検出時に詳細の不明であった羽とみられる朱色の部分や後ろ足と尾の交わり方は白虎図を参考に復原した。

朱雀図…高松塚古墳の南壁には朱雀はなく、それは南壁上面の前端の部分に開けられた盗掘孔によるものだと考えられる。今回はキトラ古墳の朱雀を参考に省略の手順を考慮に入れ尾の縞模様の数を省き、朱雀を復原した。

白虎図…西壁に描かれた虎の図。高松塚古墳とキトラ古墳、ともにほぼ完全な形で残っていたので両者の比較が可能となった。復原作業としては前足の一部を復原するのみであった。キトラ古墳の白虎図と比較すると縞模様が極端に省略されており頭から尾までの縞模様がキトラ古墳の白虎図が23本であるのにたいして高松塚古墳の白虎図は17本しかない。そして朱色が塗られている爪等色付に関しては若干の相違点がある。

玄武図…北壁に描かれていた亀蛇合体の図である玄武図は盗掘団により［図1］のように大部分が削られていた。復原に

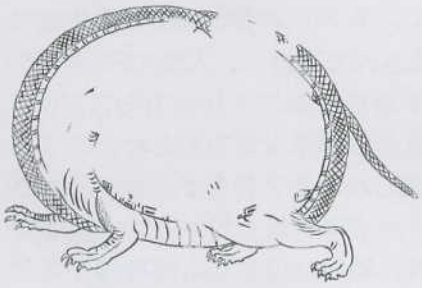


図1　北壁　玄武図

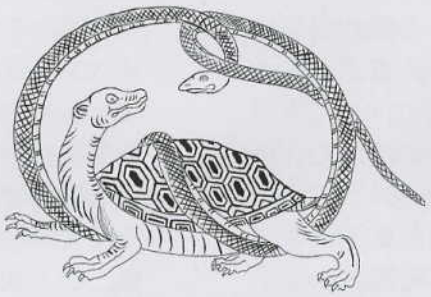


図2　北壁　玄武図　線描画

図3　北壁　玄武図　復原図

際してはキトラ古墳の玄武図を基本とし、そのほか上述した資料を参考にし、首の角度や甲羅等、残っていた線から推測し、足りない亀と蛇の顔の部分を復原した。

人物群像

人物群像は全体としてよく残っていたが顔の部分が判然としないものが多くあった。そのため、目や鼻など顔の部分が残っている像を参考にして、各人物の残っている線とあわせて表情を復原した。持ち物に関しては残りがよかったために推測が容易であり、線を少し足すのみの作業であった。

日月像図

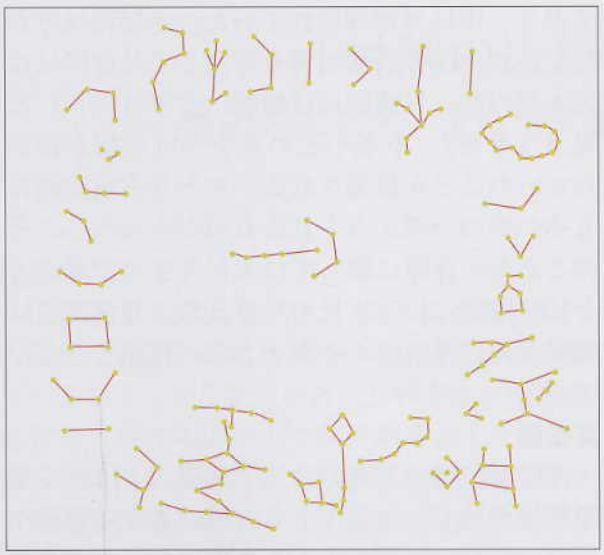
天文図と同じ天井面に日像、月像が描かれていたキトラ古墳とは異なり、高松塚古墳では東壁の青龍図の上に日像図が描かれており西壁の白虎図の上に月像図が描かれていた。日像図には金箔が、月像図には銀箔が貼られていたが、鎌倉時代に受けたとされる盗掘により剥がされており、中に何が描かれていたのか詳細は分からない。中国の墳墓の例を考えると日像図には三本足の烏、月像図には蟾蜍（ヒキガエル）と兎（ウサギ）、不老不死の実をつける樹が描かれていたことが推測される。キトラ古墳壁画にもその樹の一部とみられるものがみられる。そのことから復原に際しては来村先生の指導のもとに日像図には三本足の烏を入れ、月像図には蟾蜍と兎、月に生える樹を入れ、復原した。

星宿図

高松塚古墳の天井には二十八宿とよばれる星座が描かれていた。キトラ古墳のように黄道や赤道、内規や外規のようなものはなく二十八宿のみを表現した図であった。石室解体により新たな星も検出され、1972年の壁画検出当初は存在しないといわれていた北斗七星の存在が確認されたが、場所を間違えたためか金箔を貼りつけていただけで朱線は結ばれていなかった。そのために、今回の作業では壁画製作者の意図を考えて、場所の異なる北斗七星は復原しなかった。高松塚古墳の二十八宿は中国の南宋淳祐石

図1　東壁　男子群像

図2　東壁　男子群像　復原図



星宿図

刻天文図や朝鮮半島の天象列次分野之図二十八宿と必ずしも一致しないので、今回の作業では高松塚壁画館が復原した二十八宿を参考にした。

色付け

色付けに関しては、高松塚壁画館にある高松塚古墳壁画検出時に行われた日本画家らによる模写を基調とし、来村先生や米田先生の指導のもと壁画検出時ではなく壁画制作時の色調の復原をめざして行った。色付けに際して高松塚壁画館にある高松塚古墳の壁画検出時に模写さ

月像

白虎

朱雀

西壁　男子群像

西壁　女子群像

れた図の色を参考にしながら、古墳が築造された8世紀初頭の顔料を考慮し、色を付けていった。たとえば玄武の蛇の部分や青龍のうろこ、人物像のスカートなどからラピスラズリが検出された。このことから色調が壁画検出時より鮮やかで、よりきらめいていたと考えられる。また人物像の上衣については当時の服飾規定を参考にし、復原した。しかし明らかに服飾規定に含まれない上衣を着ている人物、すなわち黄色の上衣を着ている人物については検出時の色を参考にしながら制作時の色を復原した。一方技術的な問題で日月像図や星宿図の金箔、銀箔を表現することは困難な作業であった。印刷の関係とコンピュータの問題で金色や銀色の表現は難しく、金は山吹色で表現し、銀は灰色に近い色で表現した。

今回の復原作業では、各先生方、壁画検出に関係された方の意見や指導のもと、8世紀初頭の壁画が製作された当時の色使い、人物像の表情の再現をめざした。またこの復原に関して、大阪府立近つ飛鳥博物館の平成15年度秋季企画展「壁画古墳の流れ　高松塚―キトラ」および同企画展図録『壁画古墳の流れ　高松塚―キトラ』を先行研究として、玄武図の首の角度や青龍図の後ろ足の角度などを参考にして復原を行った。

東壁　女子群像

東壁　男子群像